

研究ノート

建築家・田上義也のドローイング

—近年の図面調査から・I—

鳴 海 伸 一

要約

本道において「田上義也」(1899-1991)の功績は建築家として言わずとして知られているが、自らヴァイオリンを弾き、タクトを振り、国外音楽家を招聘し音楽会を企画。詩を謳い、多くのスケッチを描き残すなど、広く芸術文化に造詣をもつ文化人である。

本稿では近年、田上建築制作事務所との図面整理より新たに確認された田上義也によるドローイングおよびパースに焦点をあて、その実際がどのようなものであったかを探る。

本稿は「建築家・田上義也のドローイング」(道都大学紀要美術学部 第42号/2016)の続編として位置づけ、田上の画業の実際をさらに深く調査することとした。

1. はじめに

私事、建築家「田上義也」及び、氏が創設した「田上建築制作事務所」とはこれまで20年にわたり様々な形で関わらせていただいている。「建築家・田上義也」については様々な学術研究者による調査・研究、発表、美術館学芸員による各著書、熱心な愛好家による細かな個人研究の結果がインターネット上でも公開されている。

まだ新型コロナウイルス COVID-19 が猛威をふるっていた2020年の夏、田上茂氏(田上建築制作事務所代表)との談話の中で次代に向けてこれまでの図面および資料などをどのようにまとめ、継承したら良いかという話に至り、今回の図面・資料整理をはじめの経緯となった。

2. 図面整理・調査

今回の調査ではこれまで明らかになってこなかった膨大な図面(原図、第二原図、青焼きなど)と資料(写真、現物資料、スケッチなど)が新た

に確認できた。まずはどのような物があるかを確認し、具体的な内容の把握、リスト化、データベースの構築、保管作業を目標に作業を進める事とした。

確認作業のなかで、図面はもとよりスケッチブックや色紙、メモ用紙に描きこまれたドローイング、写真、音声テープ、事務書類など多々ある中で本稿では第1段階として図面が保管されていたケースの中から該当作品を抽出。明確な消点



図1 図面調査 マスクと白手袋を用いての確認

あるものを「パース」、フリーハンドによるスケッチ感が強いものを「ドローイング」と区分した。

紙、描画材等について、想定は可能であるが具体的な検証ができないため、明記は避けることとした。ただし、さまざまな紙の種類があるので画用紙、和紙、トレーシングペーパー、紙（クラフト紙、普通紙、不明）に区分した。

年代、制作実状、現状などについては基礎資料と竣工写真、感謝状等と照合したが、調査不足を含め、まだ不明な部分も多くあり、次代の調査に期待したい。

1. 田上義也のドローイング

〈近年の図面調査から〉

◆風景（不明）※図2-1、※図2-2

中厚紙・水彩／1924年と推測

（小）165 mm×273 mm

（大）382 mm×290 mm

お気に入りの景色だったのでであろうか、定点で横構図（小）と縦構図（大）の2連作である。主線部分の墨の滲みが確認できるので水性描画材で筆による描画と思われるが、線の表情をみると万年筆やマーカーを用いていた可能性もある。写生地の明記はないが、11月の表記と画面の季節感からこの年の道東、国後での旅の記録と推測できるが、現時点で景色の特定はできていない。

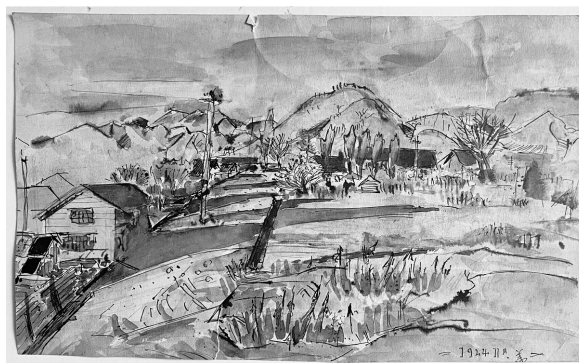


図2-1 「風景」(小)

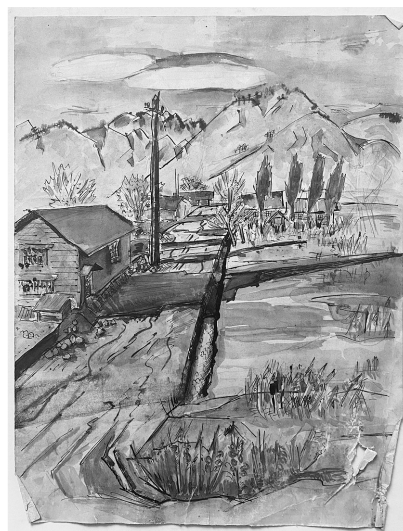


図2-2 「風景」(大)

◆「田上義也建築展覧会」ポスター ※図2-3

版画／470 mm×580 mm／1925年

ドローイングとは異なるが、版画にした資料があるので本稿にて詳細を紹介しておきたい。事務所に現存する枚数は2枚でヤケ、スレ、汚れ、破れ、欠損が大きな状態であるが、しかしこの姿こそが歴史の重みを感じられる。画面人物のカクカクとした線で表現された人物は田上の描く絵によく登場しており、原画は田上本人ではなかろうかと強く推測している。ポスターとして量産性を意識してか木版画で制作されており、上部の青部、下部の赤部の2版で構成され、見当は内見当か外見当か判断できないので版木が残っていれば是

非、拝見したい。

刀は三角刀1本によって彫られた痕跡が確認できる。裏面への油の表出が多く、屋外掲示を考えるとインクは油彩用絵具を油抜きして使用していた可能性もある。

ローラーによる油性インク盛り、バレン状はないが弱圧で画面にかすれもあるので手刷りによる事が想定できる。エディションについても何部くらい摺ったのか専門領域として大変興味深い。同じく木版画が用いられている資料に「バチューラ博士に捧ぐる田上義也提琴独奏会曲目」(1930)プログラムの表題の文字とエンゲレーヴングを意識したヴァイオリンと弓が刻まれている。田上は札幌詩学協会の創作版画雑誌「さとぼろ」第14号(1926)、25(1928)、27号(1929)に参加しており、版画制作の技術や知識もあったと思われ、自摺りなのか他者による摺りなのか著者として大変興味深いところである。

◆人間共同生活に対する

建築的表現スケッチ ※図2-4

和紙・鉛筆・水彩／700 mm×980 mm／1925年(事務所年表から推測)

後に再び描かれたものでなければ、田上義也25歳、大正14年4月26日、27日の2日間、時計台で開催された初個展「田上義也建築展覧会」に出品されたものと推測できる。アイソメで描かれた非常に哲学的な1枚で縦横に通路を配してグリッド化。切り拓かれた平地の森の中、 $\square$ の中に建築を配するのではなく、あえて通路の上に建築を配置して建造物の中を抜けるようになっている。さらに中央に大きな施設を配置することによって余地在自然に生まれ、小公園のような敷地が発生している。中心をつくり、建築という胎内を通り、通路と通路の交差に屋根の色を橙・赤・緑・青色で分けた門の様な小さな建物を配置している。田上はクリスチャンであり、著書の深読みかもしれないが西洋宗教画や金剛界曼荼羅に見られるような何か伝達の意図があるようにも感じる。



図2-3 「田上義也建築展覧会」ポスター (1925)
多色摺り木版画で制作されている。

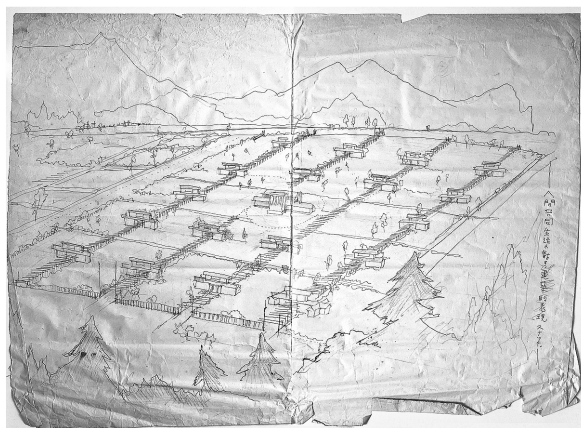


図2-4 「人間共同生活に対する建築的表現スケッチ」
画題も内容も哲学的な内容のドローイングである。

◆「海ヲ見ル丘ノ家 島野の家」※図2-5

画用紙・鉛筆・水彩／690 mm×510 mm／1926 年
事務所所蔵年表から1926（大正15），小樽の島野一二郎と確信できる。現在，この島野邸の平面図は確認できないが，海側にはパーゴラとテラスを配し，眺望を楽しめるようである。この翌年から自邸，坂牛邸，小熊邸，坂邸と戦前期における田上建築の顔とも言える「雪国の造型」が強く現れた建築作品が次々と登場する。

◆ DESIGN FOR SHIMANO'S HOUSE ※図2-6

和紙・色鉛筆／430 mm×315 mm／1926 年

紙とインク，色鉛筆の相性がよい立面である。背景と名称から前述の島野の家の別プランと推測できる。色鉛筆の数も多く，雲と青空の輪郭，画面左の海に浮かぶ船には漕ぐ人物も確認できる。建築のエレメントもデザインされた門扉，多角形の出窓，2階バルコニーでは干した洗濯物を描き込み，生活感さえ感じる。

◆ RESTAURANT ヤマニ ET CAFE アボQ

※図2-7

普通紙・インク・色鉛筆・水彩／905 mm×990 mm／1929 年

これらの資料群の中ではもっとも大きな紙に描かれた1枚である。その建築作品名から記憶に鮮明であったがこの時期，年表上に「佐々木座」（1929）「岩城新聞社」（1930）「山二レストラン」（1931）の記載があり，どれも旭川での記録となっているが，その実際の調査は不十分な状態にある。紙の大きさ，主線のリズム，幅広の平筆などでダイナミックに着彩された画面の勢いはエスキス段階のドーイングであろうか，迷いのない迫力を感じる仕上がりとなっている。建築の詳細について追って調査してゆく。

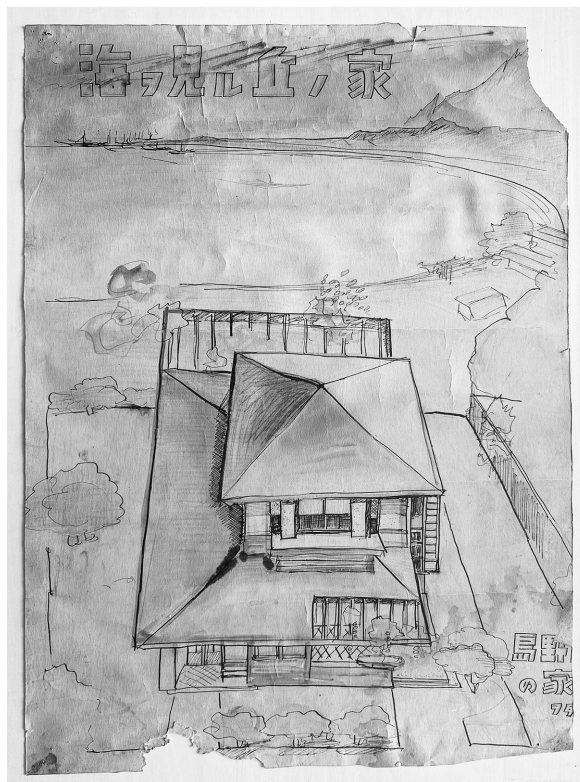


図2-5 「海ヲ見ル丘ノ家 島野の家」
画題のタイポグラフィーにも注目できる。



図2-6 「DESIGN FOR SHIMANO'S HOUSE」
図鑑のような仕上りの立面図である。

◆「外山氏之家 東京」※図2-8

画用紙・鉛筆・水彩／450 mm×725 mm／1929 年

『田上建築畫集』（建設社／発行：昭和6年）に掲載されている平面図との合致から、かねてより交友のあった外山卯三郎邸の平面ドローイングと確信できる。建築そのものはコンパクトながらテラスとパーゴラのコンビネーションは広くとられている。他のプランではこのテラスにプールが併設されていた。また書斎の本棚を外の飾り柱に転化させ、その屋外には高めの花壇を設け、軒を突き抜ける煙突は「小熊邸」（1927）と後年の「相内邸」（1934）を合わせたような贅沢な構成になっている。

田上義也と外山卯三郎との出会いは札幌詩学協会発行の創作版画雑誌「さとぼろ」をめぐって青年期に互いに心通わせていた。

外山 26 歳，田上 30 歳の作品である。

◆「精神病学者の住宅 美しき小屋

相川氏ヒュッテ」※図2-9

薄口普通紙・鉛筆・水彩／500 mm×355 mm／

1929 年頃

表記から相川正義邸と特定できる。軒やパーゴラ、家具、低木などの影、壁面や円形窓部の白絵具の使い方が興味深い。

相川正義とこの建築については「田上義也と札幌モダン」（井内佳津恵著北海道立近代美術館編／ミュージアム新書（22）P.162）に詳しく、このヒュッテの前に立つ相川氏の写真も確認できる。



図2-7 「RESTAURANT ヤマニ ET CAFÉ アボ Q」隣接する建築も描かれたスケール感のある画面構成である。

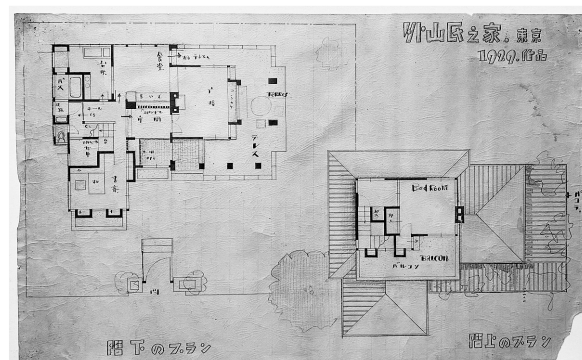


図2-8 「外山氏之家 東京」応接室から出る花壇，広いテラスとパーゴラが印象的な平面である。



図2-9 「精神病学者の住宅美しき小屋相川氏ヒュッテ」実際の外壁仕上げは異なるようであった。

◆「白浜氏之家」※図2-10

薄口普通紙・鉛筆・水彩／380 mm×530 mm／
1929 年

画面に表記されている1929年と、年表の一致から白浜潔郎と確信する。平立面を確認したいところだが現在、事務所には図面が確認できない。敷地境界線から玄関までのアプローチが簡素に広く描かれており庭花か何かを描こうとしていたのか興味深い。

また、屋根の押さえ縁の出る部分が細かく書き足されており、それがまた可愛らしく柔らかな印象を与える一枚である。紙面への収まり方、空の部分の領域取りなど特徴のある一枚である。

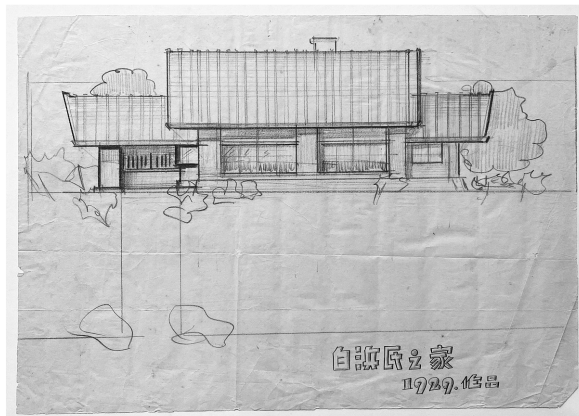


図2-10 「白浜氏之家」
手前の余白が印象的である

◆「吉田角次氏の家」※図2-11

鉛筆・水彩／470 mm×715 mm／1928 年

医師である吉田角次の札幌の住宅で「田上義也建築画集」に吉田夫人と子供達の家として写真も掲載されている。絵具を油画的に厚く盛った表現は力強くも立体感をより一層際立たせている。クラフト紙のような紙を用いているが裏への油の表出もないので水性絵具を贅沢に使用し、画面にマチエルを与えたのかもしれない。今回調査では珍しいひと作品である。

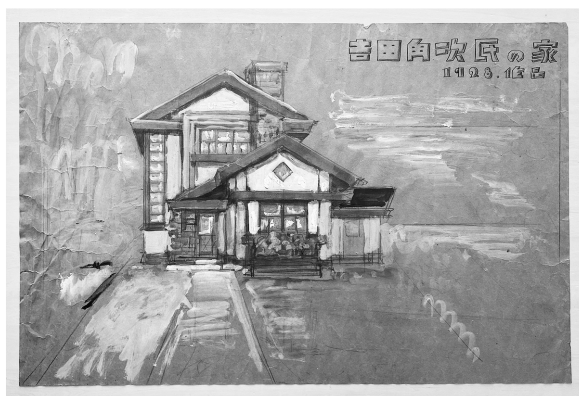


図2-11 「吉田角次の家」
マチエルが立体感を生んでいる

◆「城生氏邸」※図2-12

厚口画用紙・鉛筆・水彩／495 mm×765 mm／
1928 年

基礎資料である年表上でも確認できるが、事務所では現在のところ、このドローイングのみしか確認できず、写真や他の資料でもすり合わせができないので計画であった事も考えられるが詳細追求は次代に期待したい。



図2-12 「城生氏邸」
マットな塗り込みが珍しい着彩で画題が目を惹く

◆「住宅」／不明（旧小熊邸か）※図 2-13

鉛筆・水彩／380 mm×240 mm／1929 年

紙のサイズと裁断，画面下に大きな余白をとったレイアウトから，田上が参加していた「さとぼろ」第 27 号（1929 年 2 月刊行）に寄稿した回想の家(2)「小熊博士の家のスケッチと平面図」の下書きではないかと推測している。

屋根の形状が見渡せ，手前の樹の描画処理が師である F.L.ライトのドローイングを彷彿させる。



図 2-13 「住宅」※著者蔵
表記はないが外観から小熊邸と推測できる。
屋根の重なりが美しい鳥瞰でロケーションが描かれている。

◆「帯広厚生病院新築計画図」※図 2-14

極厚口色紙・鉛筆・水彩／290 mm×425 mm／1935 年

作品集「田上義也建築作品抄」，「北のまれびと」にも掲載され，その形状も円形の特徴ながら名作の本人によるコメントも多く残る。

左に煙を吐く汽車，右には農地，奥には山々が描かれ，空気感の伝わるロケーションを大胆に描いている。計画図とされているが，エントランスや形状が実際の形状に沿うことから具体的に進捗した段階での描画と推測する。尚，このドローイングは厚手で硬めの紙に裏打ちが施されている。

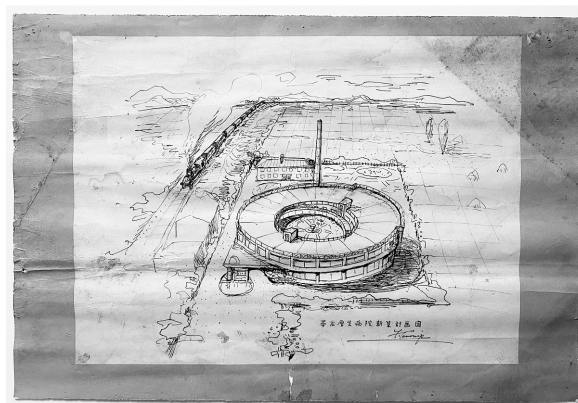


図 2-14 「帯広厚生病院新築計画図」
敷地が広大かつ豊かに描かれている。

◆「不明」（画面表記なし／眺湖荘と推測）

鉛筆・水彩／325 mm×420 mm／1966 年

「洞爺湖珍古島周辺観光開発計画案」実施のひとつで，風光明媚な景勝地，洞爺湖の湖温泉街に入る道沿いに面しているので見たことがある方も多いと思われる。

この作品のドローイングは数枚確認されており，色々と意匠パターンが描かれていたうちの実際に近いものである。この建築裏手の珍小島の開発計画のエスキスも残っている。

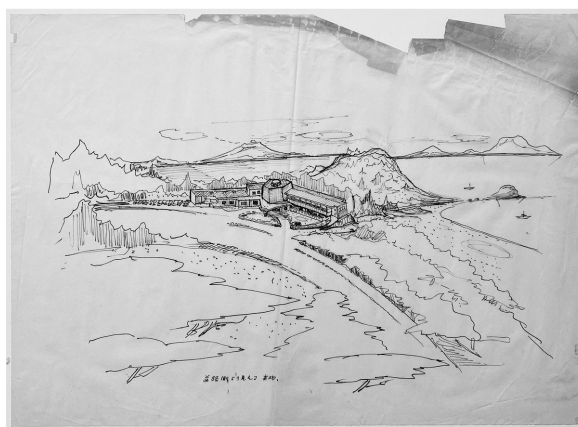


図 2-15 「不明」
表記なしであるが眺湖荘と推測できる。
この敷地での観光開発計画の記録が残っている。

◆「住宅」(不明) ※図 2-16

厚口画用紙・鉛筆・水彩／510 mm×685 mm／年代不明

複雑な屋根の形状とそのボリューム感が目をひく一枚である。エントランス付近の石積みの描写、屋根の一部と壁面の抜きと、白絵具の使い方が建築全体を上手くまとめている。手前左上部の樹木の表現は画面が重くならぬようにあえて緑の着彩をしなかったのか興味深い。花壇の差し色や、空の鮮やかな青の使い方が印象的である。

この色使いと塗りの表現は他にも確認できており、図 2-17 同時代に描かれたものかもしれない。四隅にはピンによる穴が多数あり、ドラフティングのための固定か、何かの展示としたのか興味深い痕跡である。



図 2-16 「住宅」(詳細不明)
色調が強めの画肌がめずらしい描画である。

◆「HOKKAIDO BANK IWAMIZAWA

BRANCH」 ※図 2-18

画用紙・色鉛筆・水彩／510 mm×685 mm／1956 年(年表から推測)

パースとして消点の確認できる一枚である。淡く豊かに水溶性絵具で着彩された柔らかな表現が印象的であるが逆に田上らしからぬ感じもする。この時期の必要性か連続して道銀シリーズのパー스가存在しており「道銀上川支店新築設計配景図」(‘55)、「帯広支店」(‘57) など他にも同様に V.P. を用いたシリーズが確認できた。



図 2-17 図 2-16 と同様のタッチで着彩されたもの(詳細不明)

◆「DESIGN FOR SHIKOTUKO

PARK CENTER View」 ※図 2-19

トレーシングペーパー、色鉛筆／420 mm×645 mm／1960 年

マーカーのような描画材と 4 色程度の色鉛筆による着彩で 9 月の表記があり、緑広がる盛夏の季節が伝わってくる。湖面に浮かぶボートと底面に写る影、水辺の崖の表現、背景にそびえる山稜線、森に佇む屋根など豊かに描かれた配景中心に建築作品「パークセンター」を据え、周辺にパーキング、岩風呂、テニスコート、子供庭園小動物園が敷地に広がる広大な計画である。事務所所蔵年表

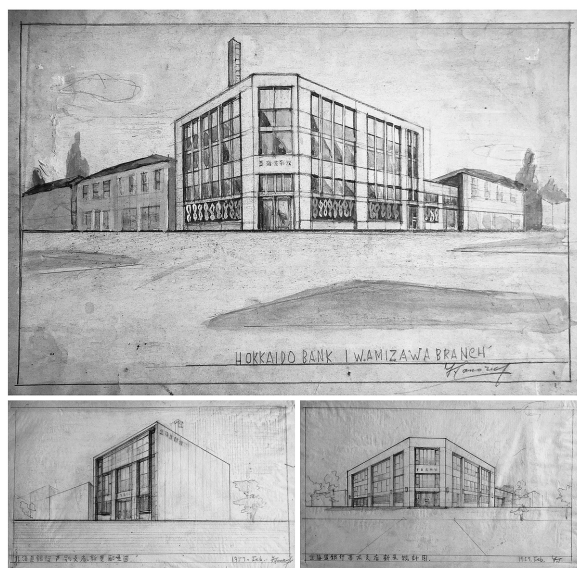


図 2-18 「HOKKAIDO BANK IWAMIZAWA BRANCH」
淡い水彩による着色でこの画肌のシリーズは数枚確認できた。

にはないが、のちに「支笏湖ユースホテル」(1962)「支笏湖ホテル鹿の湯」(1968)が建築された敷地である。

◆「小原邸 配景図」※図 2-20

画用紙・インク・色鉛筆／(小)245 mm×370 mm
(大)270 mm×370 mm／1960 年

色鉛筆を多色用いた個人住宅のドローイングで、提案別でも背景が豊かに描かれている。実施設計では左案に近い建築で、大谷石、パーゴラ、軒裏換気窓など田上の意匠エレメントが印象に残る個人住宅である。

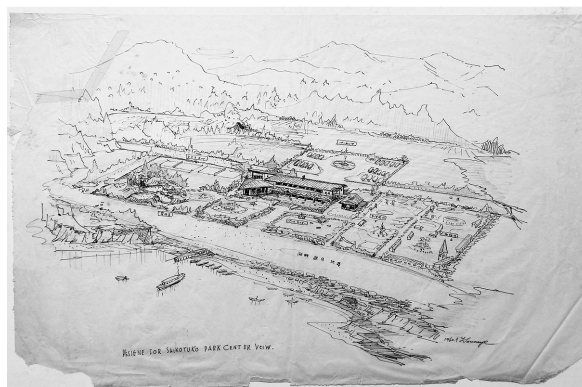


図 2-19 「DESIGN FOR SHIKOTUKO PARK CENTER View」

様々な施設が描き込まれており見入ってしまう。

◆「啄木に捧げる西条八十歌碑」※図 2-21

マーカー・鉛筆・スケッチブック／250 mm×360 mm／1962 年

ライオンズアクティビティとして設計。但しこのスケッチでは実在するものと異なり、いくつかの案からのひとつか、設計変更であることがわかる。田上が設計した歌碑については拙著「田上義也設計の戦後の歌碑・記念碑など」(2005 日本建築学会北海道支部論文 北海道大学大学院教授 角幸博共著)に詳しいのでご一読いただきたい。

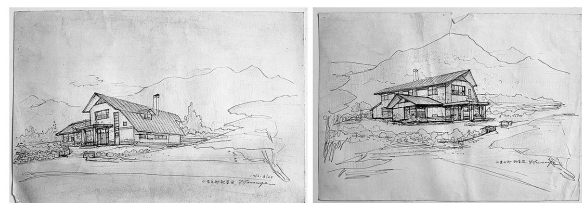


図 2-20 「小原邸 配景図」

プラン別によるドローイング。
現物は色鉛筆による軽快な画肌になっている。

◆「洞爺湖珍古島周辺観光開発計画案」※図 2-22

トレーシングペーパー、マーカー、色鉛筆／420 mm×1080 mm／1964 年

当時のロールトレーシングペーパーを長尺で使用している。湖面に浮かぶ小舟の影、山稜線、控えめに描かれた周辺施設が印象的な洞爺湖、リゾート計画で珍小島から温泉地へ向け、横に伸びた敷地内にアイススケート場、競泳プール、飛込プール、事務所を計画したウォーターフロントアクティビティで具体的には眺湖荘(1966)のみであったようだ。この計画案に附帯する図面として後日、「飛込台」(1964)「プール附属建物」(1964)が確認できた。尚、図面名では「珍古島」とあるが地図表記上は「珍小島」の「小」を用いるようである。

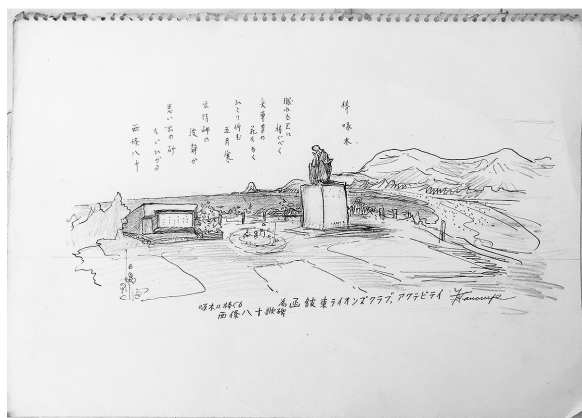


図 2-21 「啄木に捧げる西条八十歌碑」著者蔵画と文字が混在した珍しい一枚である。

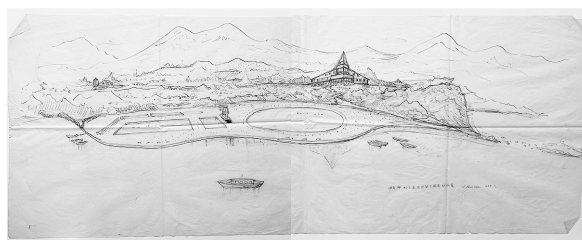


図 2-22 「洞爺湖珍古島周辺観光開発計画案」
こちらも情景や施設などが描かれており、見入ってしまう。
船とその影がとても印象的である。

◆「王子観光ホテル新築設計配景図」 ※図 2-23

鉛筆・水彩／420 mm×745 mm／1964 年

画面背景の奥に見える山，辺りはまだ，未墾のような自然が広がっているようである。右には点在する家屋と湖なのか海なのかはわからないが，円弧が広がっている情景豊かな配景図である。事務所年表でも建設地などの詳細情報は未表記になっており，実際には計画のみと思われる。このほか，立面図はないが具体的に「王子観光ホテル新築計画図」と記された平面図も確認できた。



図 2-23 「王子観光ホテル新築設計配景図」
表記はないが，太平洋沿岸かウトナイ湖周辺の計画ではないかと推測できる。

◆「Kanamoto Bill」 パース ※図 2-24

トレーシングペーパー・鉛筆／745 mm×420 mm／1964 年

札幌市内繁華街に建築された複合ビルのエスキス段階のパーズで初期段階の田上の創意が強いプランと思われる。

実施設計にあたっては施主のヒューマン的なものや風土性といった要求もあり，ファサードに大きなアイヌ意匠が採用されている。



図 2-24 「Kanamoto Bill」

この時期に見られる田上らしい意匠が高層建築に表れていたが実施設計ではディフォルメされたアイヌ文様が施された。

◆「ABASHIRI SANSUIKAKU HOTEL」 ※図 2-25

青焼き，鉛筆・水彩／295 mm×430 mm／1966 年

1935 年「網走観光ホテル」（のちに山水閣となる）の増築計画のものと思われる。築 30 年を経過したあとの増床計画だったのであろうか。このドローイングのほかに平面図も確認できたが，年表上ではこの増改築の記録は残っていない。

網走港に建築された作品で，屋上で風にはためく簾，流れる雲，壁面にかかる樹木，画面背景には帽子岩が描かれ風景を感じるドローイングである。

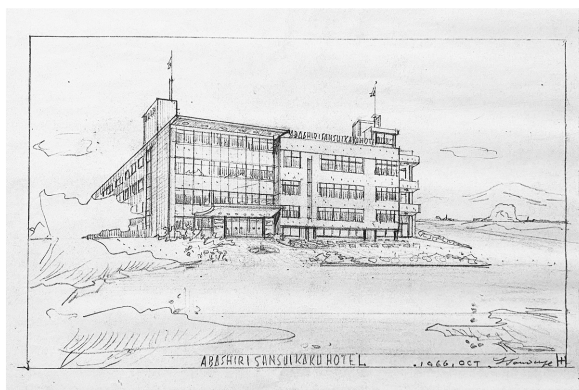


図 2-25 「ABASHIRI SANSUIKAKU HOTEL」

実現されていたら新旧にまたいだ田上エレメントを見ることができたであろう。

◆「北海道銀行クラブ Sketch」 ※図 2-26

トレーシングペーパー・鉛筆・水彩／260 mm×385 mm／1966 年

具体的な建設地の記載がないので断言できないが、背景に昭和新山らしき山がそびえている事とその建築の形から「明治生命洞爺保養所」(1966)または「北海道銀行洞爺湖保養所」と推測できる。名称の違いの詳細は推測できるが現段階では調査不足のため控えたい。

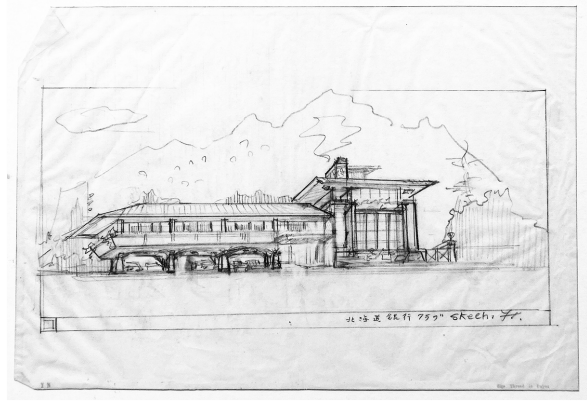


図 2-26 「北海道銀行クラブ Sketch」
年表記載や書籍掲載写真はあるが、他で写真や具体的な図面、詳細資料は調査中である。

◆「20 年後の札幌」 ※図 2-27

トレーシングペーパー・インク／420 mm×600 mm／1970 年以降

大麻から小樽方面を眺め、札幌全体を見渡す様に描かれたダイナミックな鳥瞰で、千歳、石狩、トンデン、マコマナイの地名が記され、所々にメインとなる建築が描かれている。太陽の描き方も田上がよく描く太陽である。

道路によって街がつながり、発展し整う様が描写されており、じっくり眺めて色々な建築や都市を探し、楽しむことのできるドローイングになっている。画面左手、真駒内にオリンピック施設もあり、右手前に百年記念塔があるので 1970 年以降に描かれたものと思われる。何か意味があって「20 年後」とされている様なので、所属団体の機関紙への寄稿ではないかと著者は推測している。

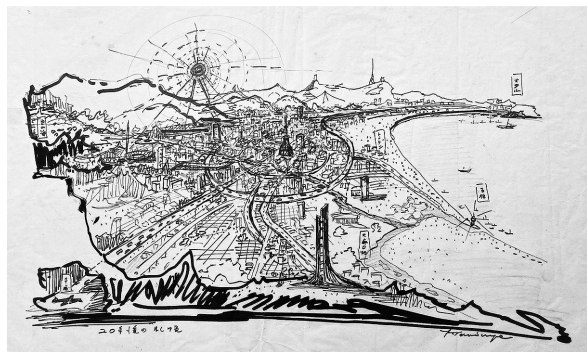


図 2-27 「20 年後の札幌」
百年記念塔が画面中央にそびえ立つので、竣工年頃の寄稿に関するドローイングかと推測している。

◆「DESIGN FOR PEACETOWER

BAGUIO.PHILIPPINE」 ※図 2-28

トレーシングペーパー・インク・鉛筆／420 mm×590 mm／1972 年

フィリピンのバギオにライオンズアクティビティとして設計された作品「平和の塔」のドローイングである。

今回の調査ではこの他、めずらしい英字による意匠図や多くのエスキスも確認することがされた。画面と輪郭の取り合い、タイトルのタイポグラフィ、サイン、ロゴ入りの仕上がりの高いシートである。

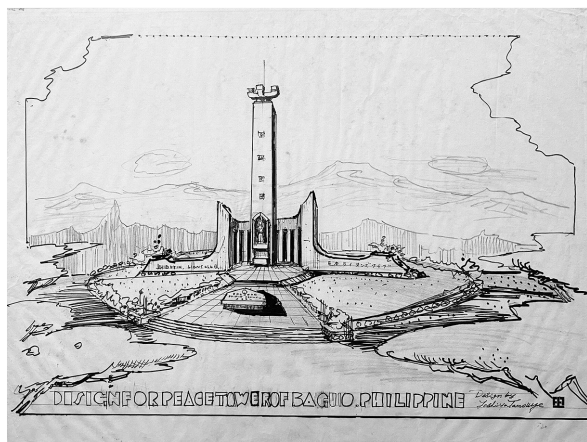


図 2-28 「DESIGN FOR PEACETOWER BAGUIO.PHILIPPINE」
今回の調査でこの作品についての資料が多く確認され詳細が整いつつある。

◆「新山村建設モデル集合施設 配景図」 ※図 2-29
トレーシングペーパー・鉛筆・水彩／420 mm×
600 mm／1973 年

背景の山々、スキー場、大地からそびえ立つ樹々、雲が時間の情景をつくり、横に広がる画面構成は壮大なロケーションを描写している。沙流川温泉にはほぼ同じファサードをもつ建築が過去に建っていた記録もあるが、基本設計のみであったのか実施設計であったのか、調査不足のため明らかにできていない。

また他の図面名称「日高ロッジ配景図」でも同様の山稜線が確認できるため計画と実施、名称の変更などすり合わせを行い、追って実態調査を進めたい。

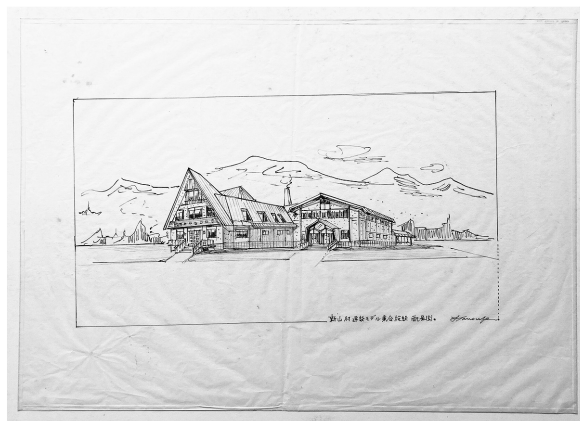


図 2-29 「新山村建設モデル集合施設 配景図」
この建築らしき写真は確認できているが、明確な実状が把握できていないため引継ぎ調査中である。

◆「月形ライオンズクラブ記念碑」 ※図 2-30
トレーシングペーパー／420 mm×600 mm
1970 年

月形ライオンズクラブ設立 5 周年の記念に建てられたモニュメントで、ライオンズアクティビティとして設計されており、今回の調査で他の案も確認できた。どれもイメージが違うもので規模の大小問わず、真摯な取り組みを感じる連作である。このほか具体的な意匠図面、当時の現物資料も今回確認され、作品データとして整いつつあるので詳細はまた追って報告したい。

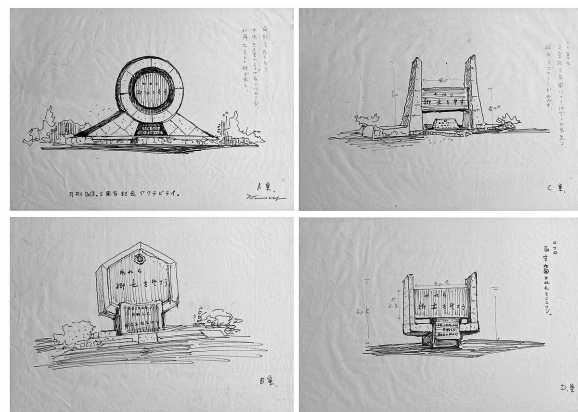


図 2-30 「月形ライオンズクラブ記念碑」
計画案で、実施設計にあたっては右上の案が採用された。このほか「月形創建百年記念塔」（1979）の計画も確認できた。

3. 事務所としてのドローイング、パースについて ※図 3

田上建築制作事務所代表の田上茂氏によると北海道銀行本店ビルにテナントとして入っていた 1960 年後半頃には所員も最大 15 名ほどの事務所になっており、この頃には構造計算やパース制作の専門担当者も在籍していたという。

その所員らによるパースや完成予想図には田上義也のサインは入っておらず、計画名、事務所名とロゴが入っている。今回の整理の中で特記しておきたいひとつにこの時代、パースによる伝達は当たり前のように存在していたが、なかでも 1970

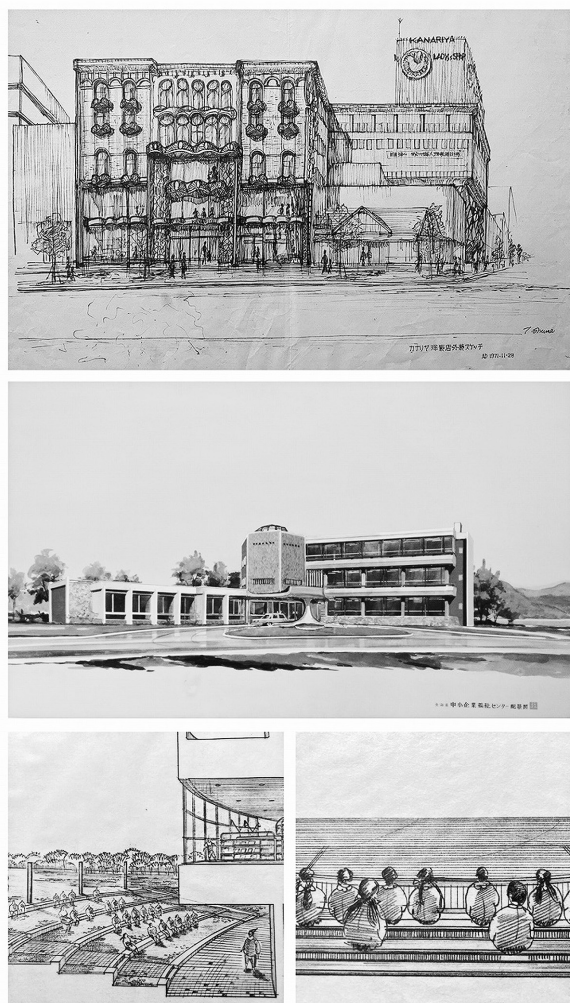


図3 所員によるパースやスケッチ

年代のパースやドローイングは所員の手によるものも多い。一見、田上によるドローイングかと見間違えてしまうほどのタッチのもの（画面表記：T. Onuma）やイラストレーションボードにレンダリングされたプレゼン用パースでは細密かつ陰影や風景もしっかりと描き込まれたパース（制作：平出）や90年代後半の『札幌市こども劇場』（1986）（画面表記：Itazu）のイメージ図ではピエロのような演者や、ステージに向かうこども達がB程度の太目の線で情景豊かに描かれている。これらの事から、設計事務所として図面の線を引けてかつ、描ける所員が在籍していたことから、田上義也の昇天後でもイメージを求められていた事務所であったことがわかる。

まとめ

現在、事務所に残る図面を除くパースおよびドローイングは以下に分類される。

- ・田上義也の自著サインが記入されているパース、ドローイング
- ・所員によるパース（計画、実施共）
- ・不明資料（製図用紙、和紙、スケッチブック、ノートなどに描かれたもの）

その実際に観て触れさせて頂いた著者の主観ではあるが、田上義也のドローイングの魅力のひとつは定規から解放された軽快な筆運びである。描画材として主線は万年筆、マーカーなど具体的に何を用いて描いていたのか明らかではないが、線や塗りの強弱、画材の選択によって画肌を豊かにしている。線幅は均一で、迷いのないスラスラとした線、心地よいストロークによる塗り込みの面は氏の創意とイメージ、描き生み出す行為に喜びや楽しささえ感じる。

最大の特徴としては背景描写が豊かである事ではないかと思う。建築家による建築のドローイングであるが、どのようなロケーションで、そこに何があるかを絵のように画面に落とし込んでいる。それも無機質なものではなく「時間」や「動作」、「小物」、「生活感」を加えることによって息づかいを感じる有機的な仕上がりになっている事が田上義也のドローイングの魅力である。

さらに、これらの事から建築作品のファサード、形状を把握していれば、ドローイングの背景に描かれた要素に注視すると建設地を推測・断定できるところも魅力である。

また、タイトル表記についても「精神病学者の住宅 美しき小屋」、「海ヲ見ル丘ノ家」など図面名ではなく、画題となっているところも興味深く、そのタイポグラフィーにも注目できる。文字を書くだけでなく、文字を見せるフォントエレメントを紙面、画面に反映させているところに田上のアルヒテクト精神の実像を今回の図面整理で感じた。

トレーシングペーパーを用いて幾度も書き換えられた線跡、ディテール検討のために何枚もト

レースされたエスキスなど、同時に建築家としての苦悩や苦労も感じ取ることができた事は云うまでもない。

なぜこのようなドローイングが数多く残っているのか考えると設計実務上での描画が大半を占めるが、展覧会などの開催により展示用の観せるための図面やドローイングも必要であった事も考えられる。例えば第2回の建築展の広報物、目録、会場写真などもまだ確認できていないが、そのための図面やパースもいま何処かに眠っているのかもしれないし、時すでに遅い状況かもしれない。

また、「田上建築畫集」「田上義也建築作品抄 64」「田上義也建築作品抄」などの出版物のために描かれた図版原稿としてのものや、所属建築団体やライオンズアクティビティ、数々の公職の機関誌への寄稿図版原稿としても数多く残っている。

浪漫を求めてはいけませんが、調査時には数十年を経てなお残る青焼き現像液のアンモニア臭、図面の巻きしわや癖との格闘、タバコの匂いや皮脂埃、カビ、虫の死骸からは当時の空気感を感じる事ができる。大災害、戦争、社会ショックなど、我々が経験してこなかった苦難の時代を潜り抜けて今ここに存在し、証人になっている図面やドローイングの1枚1枚に著者はこれらの洗礼を受けながら図面を整理することに喜びさえ感じてしまう。

おわりに

私事、工業高校建築学科ではじめて建築を学んだ頃とは随分と環境や現場は変わった。

かつての大きな製図板やドラフターを置いていた場所にはパソコンが並び、鉛筆や消しゴム、三角定規やコンパス、ディバイダ、定規等の高価な製図器、ドラフティングテープなどの消耗品は机上から消えた。T 定規の角度修正や鉛筆を削る時間、消しゴムで線を消す時間さえも CAD に取って代わった。

時代の変化は想像もしていなかった早い速度で流れ、過去の常識はいまの非常識になり、気がつくといつも当たり前にあった景色や人が居なくなり、気がつくと自身も老い、考えも古くなり、病に侵され、そして没する。

長きにわたり、なけなしの私財と時間を投じて「過去」を調査させて頂いていたが、思いの以上に時間と財力、労力、さらには場所、道具、記憶力などの持続力が必要で個人では限界はある。

ご縁あって現在、田上義也とその田上建築制作事務所の図面、竣工写真、資料など約 587 点にのぼる資料の寄託先となり貴重な資料が著者の手元にあるが、もちろん留めておく気持ちはなく、永久的に文化遺産として遺すべくご遺族さまの心情を最優先に整理・調整中である。

田上の言説「アホリズム」に救われた人間として、残された余命と覚悟が続く限りまずはやれるだけの事をやって次代と未来にバトンを渡すべく現在、資料を整えている。

【基礎資料】

- ・「WORKS」(A4/黒／ポケットファイル)
- ・「年表 用途別作品一覧」(A4 リングファイル)
- ・「年表 作品一覧年代順」(A4 リングファイル)
- ・「年表」(A4 単項、表紙無し、19 枚綴じ)

いずれも田上建築制作事務所作成

本稿についてはご遺族の田上茂氏(現：田上建築製作所代表)から執筆許諾をいただいた。表記についてはご遺族の意向からご迷惑がかからないようにと一部無表記とした。すでに書籍、文献、論文などで公表されているものは明記した。使用した図面、写真、スケッチについてはすべて田上家及び田上建築制作事務所、鳴海伸一版画制作工房／Atelier SHIN に帰属します。本稿からの無断転載・インターネット等へのアップロードへは固くご遠慮願います。

Survey of Yoshiya Tanoue's drawings

NARUMI Shinichi

Abstract

Yoshiya Tanoue (1899–1991) is a famous architect in Hokkaido. He is a man of culture who plays the violin, writes poetry, and paints and Conducting a concert.

This paper examines Tanoue's paintings and drawings.

This paper is positioned as a sequel to “Drawings of Architect Yoshiya Tanoue” (Bulletin of Dohoto University, Faculty of Fine Arts, No. 42/2016), and aims to investigate Tanoue's actual artistic practice in more depth.

